

反省ばかりの33年間

教授 橋本憲吾

平成元年（1989年）に入所して33年が過ぎ去った。好奇心に満ちたギラギラした青年も、1年余で定年退職を迎える老人になってしまった。入所当時、還暦までに到達すべき2つの目標を立てた。1つは、研究論文を最低200本出版することであった。大学付置研の教員として、達成するのが当然と当時は考えていた。1年当たり6本程度の論文を書けば良いので、楽勝と楽観視していた。30歳代は予定通りに進んでいたが、40歳代になって怪しくなってきた。50歳代になると絶望的な状況に追い込まれた。60歳になる頃には、論文を全く書かない年も続いた。その原因は、継続的努力の欠落にある。多忙な研究所業務を言い訳には決してしたくない。「言い訳しない！」のが若い頃からの私の信条である。還暦を大幅に越えた今でも、目標論文数の半数にも到達していない。若い所員に顔向けできない、大学付置研老教員として情けない現状である。後に残る所員が私を楽々乗り越えてくれる事を期待する。

もう1つの目標は、広範な技術分野を守備範囲とし、深い洞察力を有する信頼される技術者となることであった。20歳代の頃から、工学教育を行う教員は、一流の研究者であり一線級の技術者でならねばなぬと信じていた。この目標を立てたのは、私が民間企業出身であったからかも知れない。大学においても、年長の円熟した技術者が若い技術者を育てることが必須と信じていた。しかしながら、現在の守備範囲は、炉物理、熱流動、計装制御等の原子炉工学の分野から一歩も踏み出していない。オールラウンドプレイヤーとは全くして言い難い現状である。学生諸君に技術者資格取得を強制しておきながら、自らは電験1種の資格を未だ手にしていない。この体たらくな有様では、一線級どころか、二線級の技術者さえも危うい。技術者として、反省の種には事欠かない。将来、大学に、技術者として強力なオールラウンドプレイヤーが出現することを期待したい。

今、私は、60歳になる原子炉と炉室で巡り会った人達に心から感謝している。「有り難うございました。」1年後には、この原子炉から去って行き、技術者として再出発します。